



「52ヘルツのクジラたち」を読んで

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。
「公事宿法律事務所」代表。

コロナネタが続いてしまいが、救急車で札幌厚生病院に搬送されるとき、私は、1冊だけ、町田そのさんの「52ヘルツのクジラたち」(中央公論新社)を鞆に入れて入院した。しかし、発熱、呼吸苦に始まり、あまりにも強い疲労感に打ちのめされ、この本を読むことができず、退院した

後にも続いた倦怠感が残っている間も読むことができなかった。

主人公である三浦貴瑚が愛にMP3プレーヤーに繋がれたイヤホンを渡して「52ヘルツのクジラの声」を聴かせ、そして静かに語りかける。とても考え深い文章なのでここで引用したい。

「クジラはね、海中で歌を歌うようにして仲間呼びかけるんだって」「すごいよね。あんなに広大で深い海

の中で、ちゃんと仲間に声が届くんだよ」「水の中で、相手の声が響いてくるってどんな感じなんだろうね。

わたしはね、相手の思いに全身包まれるんじゃないかって思うんだ」と語り、「わたしね、寂しくて死にそうな

時に、聴く声があるんだ」「クジラの声」「普通のクジラと声の高さが一周波数って言うんだけどね、その周波

数が全く違うんだって。クジラもいろいろな種類がいるけど、どれもだいたい10〜39ヘルツっていう高さで歌う

んだって。でもこのクジラの歌声は52ヘルツ。あまりに高音だから、他のクジラたちには、この声は聞こえないんだ」「52ヘルツのクジラ。世界で一番

孤独だと言われているクジラ。その声は広大な海で確かに響いているのに、受け止める仲間はどこにもいない。

誰にも届かない歌声をあげ続けているクジラは存在こそ発見されている

けれど、実際の姿は今も確認されて

いないという」「例えば群がものすごく近くにいたとしても、すぐに触れあえる位置にいても、気付かないまますれ違ってしまうことなんだろうね」「本当はたくさんの仲間がいるのに、何も届かない。何も届けられない。それはどれだけ、孤独だろう」「今もどこかの海で、届かない声を待ちながら自分の声を届けようと歌っているんだろうなあ」と語り続けていくのである。

この本を読んでもう25年くらい前のことを思い出した。当時、私は弁護士として児童虐待防止に取り組み

活動に思いを傾け始め、全国的に先進的な活動をし始めていた大阪府や愛知県の勉強会に出席していた。そ

こで、大学の先輩でもあり児童虐待防止に前のめりになっていた岩城正

光弁護士から話を聞いた。岩城弁護士は、親などから虐待をされている

子どもたちとかかわるようになってすぐ、虐待親にも目を向け、あるとき、「子殺し」の刑事事件の弁護士と

なった。判決で執行猶予になるかどうかという視点では何も解決できないことをひしひしと感じ、刑事弁護

人であればいつでも何時間でも被疑者・被告人と接見できることが一般的であるが、手弁当にて友人の精神

科医を引き連れ、毎日、時間制限がかかる一般面会を通じて精神科医と接見を続けていったそうである。その

後、その母親には執行猶予判決が言い渡され、「来週から治療を始めましょうね」と握手を交わして笑顔で別れたが、週が明けてすぐに母親は自らの命を絶った。その事実を知った岩城弁護士は、「自殺するために執行猶予にしたんじゃない! あたらしい人生を歩んでほしかった」と精神科医と泣き叫んだそうである。

「52ヘルツのクジラたちの声」。私は、日々の仕事を通じて、この届かない

声をどれほど聴こうとして生活できているのであろうか。年を重ねる中で身体も随分と疲れてしまい、心も

相当摩耗してきていると思う。心のアンテナを張り巡らせているつもりではあるが、実は、それはカモフラージュで、とうの昔にあきらめてしまっ

ているのではないか。懸命に努力してもいつも足りないことしかできていないことを思い知りながらも、どこかで

折り合いをつけている、それも早めにつけてしまっている自分がいるのではないか、などと再び書生論のように

考えていた。しかし、この本を読んで1つだけ変えていきたいと思っている。とても、そして、すごく小さなことではあるが、毎日、短い時間であったとしても、目を閉じて耳を澄まし、「誰

にも届かない歌声」を感じてみたい、受け止めたい、今日はその歌声はな

かったのかと思ひ浮かべることから始めたいと思っている。